

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」3月号 (通巻第22号)

2009年2月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

3

March Edition

2009, vol.22

Free of charge

この人の声が聴きたい◎3月

大貫妙子さん (ミュージシャン)

いつも通りを我々は駆け出していった



山下達郎さんは東京都立竹早高校、坂本龍一さんは都立新宿高校、そして大貫妙子さんは都立桜水商業高校を一九七〇年前後に卒業した。

大貫さんは、山下さんとシユガー・ベイブを結成し、「SONGS」(一九七五)を一枚だけリリースして解散。翌年には「Greyskies」でソロ・デビューを果たしたが、これ以後、坂本さんは大貫さんの多くのアルバムでアレンジを担当している。

当時の都立高校には独特の気分があった。それは重い閉塞感とそれをぶっ壊したい欲望のないまぜになった気分、自由に憧れつつ、倦怠感の泥濘から足を引き抜くことができないもどかしさでもあった。一九六八〜一九六九年の世界的文化闘争の気運を感じていたせいもある。新しいものは反抗でしか実現できないという信念もあった。もちろん、音楽もその例外ではなかったと思う。

大貫さんの音楽は、凛とした情感をどの作品にも貫き通している。たとえ、恋する女性の歌であっても、何かを懐かしむ歌であっても、きりっとした彼女の立ち姿と同様に、その情感は筋が通っていて、美しく、清々しい。例えば、「SONGS」に収録された「いつも通り」を聴くと、私はザ・ピーナッツの「ウナ・セラ・デイ東京」をどこかに感じながら、両者のエモーションの違いに気づく。

作詞家の岩谷時子さんは、「街は いつでも 後姿の 幸せばかり」であると、歌の主人公に託して、抗しがたい街の真実を伝えた。それを受けて、「ウナ・セラ・デイ東京 ああ」というため息が歌を締めくくる。これは、街

に住みながら、街の論理に従順であるしかな者の慨嘆である。

一方、大貫さんは、「街は いつも通りきつと いつも通り にぎやかな人波があふれる」と、ほぼ同様の真実を表現しながら「だから笑ってかけだす」という、まったく別の選択を示した。

「いつも通り」は別れの歌である。そして70年代初頭の別離に関する凛然たる決意表明であり、日本の歌の文化の「いつも通り」から脱出する「かけだし」の宣言でもあった。

ラジオデイズの「ミュージックトーク」で、大貫さんは、デビュー間もない頃の音楽業界との「闘い」について語っている。これは勝手な推測だが、彼女もまた、異議申し立てを恐れない60年代末の都立高校文化を共有している。十代の頃の大貫さんの話も楽しかった。

五反田の喫茶店で歌っていた頃、渋谷のヤマハへ楽譜を探しに行ったという。腰まで伸びた髪を風になびかせ、ベルベットのマキシ・コートを着て、ギターを肩にかけた彼女に、ヤマハの店先に座っていた二人の少年が声をかけた。

「あの、ミュージシャンの方ですか?」

このナンパを機に結成された「三輪車」というグループは短命に終わるが、大貫さんは、ワナー・パイオニアで矢野誠さんと出会い、その縁で四谷の「ディスクチャート」に出入りするようになり、山下達郎さんと知り合う。70年代初頭の、まだロックが産業になり切っていない頃の伝説のような話である。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(登録料)にならると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ「田中宇の国際ニュース解説」のエッセンスを毎月本人の肉声でお届けする『世界はこう読め!』、人気コラムニスト小田嶋隆氏が世相を斬る『ラファイカルトーク』、大貫妙子さんや林立夫さんなど、ミュージシャンに話を伺う『Musical Talk』が好評。現在、第一回を無料ダウンロード中です。さらに、慶應丸の内センターパス(慶應MCC)が開催している『夕学』のなかから、各分野の第一線で活躍する研究者・経営者・文化人・ジャーナリスト等による講演を厳選してお届けしています。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた『声のエッセイ』コレクションが評判。また、『声の詩集』シリーズからは、女優馬丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調『ゴリ』『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源二百二十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に筆を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてください。まずは、試聴ボタンを。

立川談笑独演会

【日時】3月23日(月)午後7時開演(午後6時半開場)
【場所】関交協ハーモニックホール

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えて行き、自家薬籠中に演じざる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。

立川談笑

(たてかわ・たんしょう)

落語立川流。平十七年真打昇進。東北弁の「金明竹」や現代風にパージョンアップされた「片棒・改」など古典落語をあらゆる方向から解体し、時代や社会ネタを織り込んで再構築した型破りの落語を次々と放つ鬼才。おなじみの噺もただでは済まされぬ爆笑ネタに。テレビの司会やレポーターとしても活躍中。



米粒写経

(こめつぶしきょう)

平成一〇年、『浅草お兄さん会』でデビュー。良い意味で古臭い居島一平の爆発的かつ徹底したボケに、サンキュータツオのクールで弛緩したツッコミが観るものを虜にする。現在、関東でふたたび漫才ブームを起すべく、東京の若手漫才師が集結する『漫才バカ一代』を定期的に主催している。オフィス北野所属。



明烏い話

連載第23回

本田久作



イギリスではその昔、芝居には小道具大道具というものがほとんどなかったのだそうだ。背景すらもない。本来ならば豪華なテーブルや椅子がしつらえてあるべき豪邸の客間の場面でも、舞台上に箱をいくつか転がせておいて、それを椅子やテーブルの代わりにする。あとは俳優の演技力と台詞の力で、その舞台上にはない椅子やテーブルをあるように見せるのである。だから、当時の人々は「芝居を見る」とは言わず「芝居を聞く」と言った。そのことを知った時、落語と同じだ、と私は思った。

私は「落語を見に行く」という言葉が嫌いである。落語は「見る」ものではなく「聞く」ものだ。見に行こうが聞きに行こうがやっていることは同じだが、「噺家」と「落語家」や「芸人」と「芸術家」を比べるのと同様、言葉によって生理的な好き嫌いが生じるのは仕方がない。私は生理的な好き嫌いによって、落語を「聞きに行く」のである。極端に言えば、落語は見なくても聞かざればそれでよい、と思っている。だからある著名人が、落語のCDやテープは聞かないがDVDやビデオなら見ると発言しているのを知った時は本当に驚いた。ある人

から、落語は好きだけど志ん生だけはどうしても好きになれない、と言われた時と同じくらい仰天した。『蒞問問答』をはじめとして、仕事が見えなければその落語の肝の部分からわからない噺はいくらでもある。あるけれども、それでも少なくとも私にとっては落語は「見る」ものではなく「聞く」ものだ。落語の速記本は読んでいて楽しいが、それでも落語は「読む」ものではないように、「見る」ものでもない。そういえば、映像の見えない落語のCDを軽蔑しながらDVDやビデオならば落語を「見る」と言った人は、速記本のファンでもあった。

私の落語好きのピークは中学生の頃である。私は大阪人であるから聞くのももっぱら上方落語で、当時の私にとっては落語イコール上方落語であった。その私がその頃一番楽しみにしていたのが月に一度行われていた「上方落語を聞く会」だった。昭和五十年頃の話である。とにかく好きで好きで、三十九度の熱をおして行ったこともある。当時大阪では落語ブームと言われており、私もその余波を受けた口だと思えるのだが、実体はどうだったのか心許ない。今の感覚ではブームというのは女子どもが集まってこそこのブームである。だが、当時「上方落語を聞く会」に毎回必ず来ている子どもは私だけだった。客席に若い女などいたかどうかともあれそのおかげで中学生の私は客席では目立つたのだろう、毎回来ているおじさんたちからよく声をかけられた。私の方でも常連の客の顔は自然と覚えてしまう。その常連の一人に盲人のおじさんがいた。

いつだったか、「上方落語を聞く会」の会場でこのおじさんから声をかけられたことがある。「ぼく、いつも来てるなあ。小さいのに落語好きなんやなあ」と。どうしてこの人が、私が毎回この会に来ているのを知っているのか、

と一瞬驚いたが、知っていても不思議ではない、とすぐに思い直した。このおじさんは目が見えなくても落語を聞きに来ている。「僕のことも耳で『聞いて』知ってはったんや」とその時中学生だった私は思ったのだ。

●ほんた・まきゅうさく

一九六〇年大阪府生、落語作家。二〇〇一年の「仏の遊」が国立演芸場台本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本関係の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主左受賞作「玉手箱」(国立演芸場台本募集優秀作)、「儂の葬式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讀太ばなし 貳拾貳

春風亭百栄

き 「木乃伊取り」

小朝師匠が以前「談志師匠の芝浜を聞いて時間の感覚が麻痺した」と言っていました。スグにその感覚が理解できたのは、同じ談志師匠のこの噺を聞いたから。ドラッグのことはよく分かりますが、中学生の僕がトリップさせられた一撃。

貳 「天使と悪魔」 (新作落語)

このまま古典でやっていこうか？ それとも新作に……、と本気で悩んでいたときには、もうだいたい頭の中で出来上がっていて、細かなクスグリもザツと揃っていて、オチもこんな感じで……、やる気まんまんだっただけです。

参 『浮世根問』

古典はもちろん、新作にも基本の噺。この噺が元になって「つっこみ根問」などの新作に。前座時代はみっちり稽古。フラれた夜も一人ぼっちの部屋で涙ながらに、「隠居さんこんちわあ、……そしてサヨナラ、〇〇ちゃん」

春風亭小柳枝

四代目春風亭柳好に入門。昭和五年に柳昇門下へ。五三年真打昇進。威勢のいい江戸っ子語り口が粹な古典派の重鎮。芸術協会のハワイアンバンド「アロハマンガラーズ」メンバー。昭和五年、NHK新人落語コンクール優秀賞、平成三年度文化庁芸術祭賞受賞。



八光亭春輔

昭和三九年、八代目林家正蔵（彦六）に入門。昭和五四年真打昇進。師匠の芸風を受け継いだ骨格のある落語を聴かせてくれる貴重な噺家のひとり。日本舞踊藤間流の名取りで、数少ない寄席噺りの継承者でもある。噺の後の寄席の踊りは必見。平成五年度芸術祭賞受賞。



立川談四楼

昭和四五年、立川談志に入門。五八年、立川流落語会第一期真打となる。作家としても活躍中。その才能は落語にも活かされていて、生き生きとしたセリフやわかりやすい時代描写で落語初心者からツウまでを唸らせる。昭和五五年、NHK新人落語コンクール優秀賞受賞。



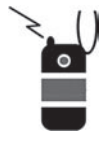
オリンパスシンクろ きわめつけ落語会

「日時」3月18日(水)午後6時半開演(午後6時開場)
「場所」お江戸日本橋亭

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗②

柳亭こみち



洋服は着ない。靴もブラジャーも持ってない。ハワイ旅行も着物で行く。家事は割烹着で、浴衣が寝巻。呉服屋に生まれ、中村富十郎丈の内弟子生活の後、宗家・吾妻徳穂の内弟子を勤めた吾妻流幹部。うどんや西瓜の食べ方すら江戸前のその人は、私の日舞の師匠・吾妻春千穂である。

出会いは二〇年前。第一印象、ただ者じゃない。家でも街でも舞台でも、存在感は絶大だ。身長は私と同じ一四八センチ。その体で壮大な世界を繰り広げる芸と生き様に度胆を抜かれた。体型を言い訳にすることは、もうできない。
「本物に触れること」が芸を磨くならば、私の最も身近な「本物」の一人、師・春千穂の、芸を間近に見続け傍で同じ空気を吸えることは、私の宝。その姿は、まるで江戸時代から抜け出て来たように体から古典が匂い立つ。

与える鞭は半端を嫌う。着物を着慣れぬ頃から「着付けは5分間で」「指の感覚だけで着なさい。鏡は見

るな」。踊りの稽古では「腐った田舎娘!」「トドがのたうちまわってるんじゃない!」と叱咤。「褒めても無意味」と激励はしない。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。担当の保険営業員に「私あなた嫌い!」担当替わってちょうだい」と面と向かって言う。でも懐に飛び込んだ人間には何も惜しまず与える。

こういう人が日本の文化を支えていると、私は思っている。

●りゅうていこみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は明。特技は日本舞踊、吾妻流名取(宝妻春美)。落語協会野球部、チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第22回

喧嘩



松井高志



博徒ものの講談本などでは「喧嘩」と書いて「でいり」などとルビを振っている。ここでは、軍談に出てくるような大規模な「台戦」ではなく、大きくても博徒の抗争程度までを「喧嘩」と呼ぶことにして、それにまつわるきまり文句を紹介してみる。

上方落語に時々出てくる、

後の喧嘩を先にする

という諺(教訓)がある。「最初に能く争

論し置けば、後に紛議の種残らずして却てよしとの意(「諺語大辞典」)である。たとえば奉公人を雇うとき、「あらかじめ後で揉めないように言っておく(後の喧嘩を先にしておく)が、給金は安いよ、それでも構いませんか」と雇い主が言うような時に引用される。

喧嘩に被る笠はない

などという言い回しもよく聞く。喧嘩に巻き込まれたら傷つかずに済むわけにはいかない(防ぎようがない)ものだ、ということ。だからふりかかる火の粉は払わねばならぬ、などといった主人公が売られた喧嘩を買う場合に使われる。これは「幡随院長兵衛」や「祐天吉松」といった侠客もの講談に多い。

喧嘩すぎでの棒千切

は、むろん喧嘩の場面にも使われるが、「タイミングが遅れたため役に立たない支度」の比喩である。「争い果てての〜」ともいい、「棒千切」は「棒乳切木」ともいう。「乳切木」は物をつぐための棒で、喧嘩の時にも使われた。喧嘩関係の「名言」となると、なんとこれも国定忠治の次の一言。

男が喧嘩する位なら、仲直りするような喧嘩をするな

「やるからには、当の相手を殺してしまえ。相手を殺さない位なら笑って済ませろ」と続く。さすが忠治どん、インパクトのあるセリフである。

●まつい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く」話芸のきまり文句(平凡社新書)、『ナンドク』(難読漢字目習帳)、『バジリコ』(江戸に学ぶビジネスの極意)、『アスペクト』など。「話芸」のきまり文句。辞典)サイトは <http://wagaidon.com/odgprnity.com/>

オリンパス
シンクスの寄席 **瀧川鯉昇独演会**

【会場】お江戸日本橋亭「吉越」2800円（前売2500円）
【時間】午後7時開演（午後6時半開場）

●4月15日◎

瀧川鯉昇・「ダスト」春風亭一之輔

※予約申込受付中。ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話 011-3341-1130より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語りこに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

- 3月3日 吉村絵美留（絵画修復家）
- 10日 山本一力（作家）
- 17日 武田昇（京都「有次」包丁鍛冶）
- 24日 土屋賢二（哲学者・エッセイスト）
- 31日 雨宮処凛（作家）

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

- 戦後落語論（三遊亭円丈 vs 本田久作）
- 戦後詩人論（高橋源一郎 vs 小池昌代）
- 戦後マンガ家論（養老孟司 vs 内田樹）



歯に衣着せぬ発言で世相を斬る痛快トーク

- 「田中宇の世界はこう読め!」
 - 「小田嶋隆のグラフィカルトーク」
- ミュージシャン・ロングインタビュー
- 「MusicTalk 大貫妙子の世界」



温もりと味のある声のエッセイ/新鮮な詩の物語り

- 詩人の心の原風景（谷川俊太郎）
- 『水仙』瀬戸内寂聴（朗読：有馬稲子）
- 詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか（鳥丸せつこ/正津勉）



本邦初! 世界初!
江戸弁で聴く落語調ゴーゴリの魅力

- 『外套』(1~10) 入船亭扇辰
- 『鼻』(1-10) 柳家三三



面白くて物凄、当世落語家の噺がいっぱい
三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志五、柳家小糸、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥、三遊亭遊雀、入船亭扇辰、林家彦いち、古今亭菊之丞……etc.

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトによるこそ! ※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

如月の落語会ひとつ

第二十一回を迎えたオリンパスシンクスの寄席（二月二十五日）は、創作（新作）落語の王者・三遊亭円丈と中堅の旗手・三遊亭白鳥の師弟対決! 西新宿のハーモニックホールは満員盛況ながら心地よい緊張感に包まれていました。開口一番は**春風亭ぼっぼ**さんでネタは「たらちね」。可愛いぼっぼさんの妙に艶っぽい落語は将来が楽しみ。さて先手は白鳥師匠、なんと古典の時そばを普通に演じ始めます。本領発揮は、調子のいい客が一文掠めたのを見た馬鹿な男が真似をしようと捕らえた蕎麦屋のタダモノではないその行状。これは聴いてのお楽しみ。白鳥古典「エロ時そば」で会場は早くも爆笑の渦に。続く円丈師匠、季節はずれにもかかわらず丸くエロに。続く円丈ワールドの名作「藪椿の陰で」。迷い犬である大きなモップ犬によってバラバラだった家族の心が一つになるという人情噺。家族に追い出されて、



いなくなつたモップ犬が神々しいほどに見える。またも古典の寿限無と思いきや「スーパー寿限無」。白鳥流の大爆笑噺に大変身。肩の力が抜けた白鳥師匠、なにか突き抜けた感じのおもしろさが爆笑。人気は自信を生み、自信は芸を磨き大きくするのだ。トリはもちろん円丈師匠、アフガニスタン人落語家が大活躍? する「ランゴランゴ」。相撲が国際化してちよつとおかしくなつてきたように落語の世界も国際化するとうなるか、近未来を予測する!? 円丈爆笑落語の名作であります。創作落語ってほんとうにおもしろいですねえ。（ラジオデイズ寺和尚）

「オリンパスシンクスの寄席」携帯用特別コンテンツ

シンクスの寄席特別コンテンツでは、シンクスの寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



バーコードで簡単アクセス!
左のバーコードを携帯のカメラで読み込み、無料画像認識アプリ「sync ★R」（シンクスの）をダウンロード。

空メールを送信してアクセス!
もしくは a@gwmj.jp
ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。

次にアプリから「sync ★R」（シンクスの）を起動、月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、2、3ページの落語会情報内にある噺家さんプロフィール写真を撮影して保存・送信すれば OK。

※各写真の全体が入るように、ピントの合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。

シンクスの (Sync ★R) とは?
オリンパス株式会社の開発による先進の画像認識技術を活用したカメラ付携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

新宿御苑では、梅や寒桜、水仙の花々が咲き進んでいます。モノトーンだった森がピンクや白、黄色に染まり、花の競演が楽しいこの頃。春が近いことを感じます。
さて、ラジオデイズのコンテンツには、話芸のルーツと言われる節談説教が初登場。文芸対談や大物ミュージシャンのインタビューなども続々登場。春に向けてますます華やいでまいりました。ぜひお立ち寄りを。